ISSN 2436-3677

音楽教育実践報告誌

第 3 号

2022 年 3 月

静岡音楽教育研究学会

目　次

【巻頭言】　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・　　　　田代　和久　2

【実践報告】
音楽科教員養成におけるピアノ演奏技能育成のための実践──「学内学会」を通して見る楽曲分析・解説を伴った演奏発表の可能性──　・・・・・・・・・・・・・・明和　史佳　3

【授業提案】
中学校の音楽鑑賞教材に対する様々なアプローチ──スメタナ《我が祖国》〈ブルタバ〉を例に──　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・太田　暁子　11

M.R.S.理論に根差したソルフェージュ教材の提案
・・・・・・・・・・・・・・・・・三沢　大樹　髙山　理未　松浦　杏　八木　瑞希　17

【事業報告】
2021 年度　事業中間報告　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・23

【常葉大学教育学部初等教育課程 音楽専攻生 特別研究（卒業論文）題目】
2021 年度　卒業生　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・24

【音楽教育実践報告誌 投稿規約】　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・25

【編集後記】　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・27

巻頭言

静岡音楽教育研究学会
会長　田代　和久

コロナ感染症の影響により，今年度も夏の研究会，2 月の定例会それぞれの開催が中止となりましたが，この「音楽教育実践報告誌」第 3 号については予定通り発刊することができました。発刊にあたり，役員の皆様のご尽力，会員の皆様のご協力に心より感謝を申しあげます。また，今年度，卒業生以外にも入会いただくことができました。今後の学会活動の外からの新たなエネルギーを大いに期待すると共に，音楽専攻卒業生の皆様にとってますます有意義な情報交流の場になりますように願っております。

2 月 5 日，感染症対策徹底のため大きな制約を課されながらも，音楽専攻卒業演奏会が無事に開催されました。入場制限も行い，例年とは大幅に異なる実施でしたが，不満を抱くことや，投げやりになることもなく，全身全霊を傾けた演奏で，4 年間の成果を立派に披露してくれました。あらためて音楽の持つ力の大きさ，真摯に音楽に取り組むことの重要性に気づかされました。また，初めての試みでありますが，演奏のライブ配信を行いました。予想以上に多くの方にご視聴いただくことができ，卒業生からも反響があり，今後に向けての大きな収穫となりました。感染症対策により，授業において十分歌唱，楽器演奏ができない状況があり，ご苦労をされている会員の皆様も多いかと存じます。このような状況であるからこそ，もし教えること専門となっていて，音楽することからは遠ざかっていましたら，学生時代を思い出して，再度歌や楽器に取り組んでみてください。その経験は，コロナ渦収束後の指導に必ずや生かされると思います。この学会は音楽そのものの魅力を共有し，発信できる存在でありたいと考えています。今後のよりよい活動のために，是非，ご意見，ご要望をお寄せください。誌上ではなく，対面で皆様をお会いできる日を心待ちにしております。

《実践報告》

音楽科教員養成におけるピアノ演奏技能育成のための実践
—「学内学会」を通して見る楽曲分析・解説を伴った演奏発表の可能性—

明和　史佳*

抄　録

本稿は、楽曲分析・解説を伴った演奏発表を通して、音楽科教員に必要なピアノ演奏技能や豊かな表現力、音楽教員としての資質育成の可能性を見いだすことを目的としている。

音楽科教員養成校である本学におけるピアノ系授業では、豊かな人間性を有した表現者として、音楽の素晴らしさを伝えることができる教員の育成を目指し、単なる演奏技能の修得だけでなく、楽曲を理解し、その良さや自分の思いを他者に向けて表現することの重要性を意識している。しかし、日ごろ指導を行う中で、説得力ある演奏表現に必要な楽曲分析の活用に課題があると感じてきた。そんな中、授業外の活動である「学内学会」という事業では、楽曲分析や解説を伴った演奏発表が行われており、分析結果から導き出した表現方法を自らの言葉と演奏で主張していくことで、聴き手が納得する演奏をしようと強く意識する様子や、自らの理想とする演奏表現をさらに追求していく姿がみられた。これらの学内学会での発表の様子から、楽曲分析を通して自身が理想とする表現を追求、言語化し、その結果を演奏に反映させて他者に伝えるという実践的な演奏経験を持つことは、ピアノ演奏技能の上達だけでなく、音楽教員としての資質や豊かな人間性の育成にも効果があると考えられ、発表後の学生の楽曲分析活用の様子や学習効果などについて、さらに継続的に研究していく必要性が示された。

キーワード：ピアノ指導法、ピアノ演奏法、楽曲分析、教員養成、音楽科教育

はじめに

音楽科教員には、授業や音楽活動を円滑に行うことができるよう、声楽やリコーダー、和楽器等、様々な演奏技能を身につけていることが求められている。なかでも合唱指導や歌唱、器楽授業における伴奏のほか、創作、鑑賞授業などにおいてもピアノを用いる機会は多く、ピアノ演奏技能は声楽の演奏技能と並んで教員が身につけるべき最も重要な実技技能といえる。中学校学習指導要領（平成 29 年告示）では、(1) 曲想と音楽の構造や背景などとの

---

* 常葉大学教育学部

関わり及び音楽の多様性について理解するとともに、創意工夫を生かした音楽表現をするために必要な技能を身に付けるようにする。(2) 音楽表現を創意工夫することや、音楽のよさや美しさを味わって聴くことができるようにする。(3) 音楽活動の楽しさを体験することを通して、音楽を愛好する心情を育むとともに、音楽に対する感性を豊かにし、音楽に親しんでいく態度を養い、豊かな情操を培う。の 3 つを音楽科の目標として挙げている。これらの目標を達成させるには、まず教員が楽曲の構造や特徴を理解し、時代背景や作曲家の意図をくみ取った音楽性豊かな演奏表現ができる能力を身につけている必要がある。また、生徒が音楽の楽しさや良さを実感することができるよう、自分の意思や思いを込めて表現することを導いたり、引き出したりできるピアノ演奏能力を有していることが求められる。生徒に音楽の良さや美しさを味わわせ、楽しさを感じてもらうには、まず教員が音楽の奥深さ、素晴らしさを熟知し、他者にその良さを伝えることや、自分の思いを表現することの喜びを実感していることが必要であり、豊かな情操や感性を育むには、知識や技能を教えるだけでなく、子どもたちと一緒に音楽を楽しみ、教員自らが音楽の良さを表現する姿を示すことが重要である。

常葉大学教育学部初等教育課程音楽専攻（以下、音楽専攻）では、2 年前期から 4 年後期にわたり、音楽科教員に必要なピアノ演奏技能の修得、向上を目的とした授業を行っている。この授業は、個人レッスンを主とし、「基礎器楽演習」「器楽演奏法」「器楽演奏法演習」「器楽表現法」「器楽研究」「音楽総合演習」（以下、ピアノ系授業）と継続して行われており、単に教育現場で困らないための演奏技能を身に付けるのではなく、豊かな人間性を有した表現者として、音楽の素晴らしさを伝えることができる教員の育成を目指している。そのために、授業ではグレード別テキストを使用し、学生個々の習熟度に合わせた学修計画をたて、細やかな指導をするよう心掛けているほか、楽曲に込められた思いや、自身の意思を他者に向けて表現できるよう、実技試験や授業外の活動等でなるべくたくさんの演奏経験を積むことを意識している。学生も、自身の演奏能力の向上を図ろうと毎回意欲的に授業に取り組み、自宅や大学の練習室などで熱心に練習に励んでいる。しかし、自身がどのような演奏表現をしたいか主体的に考えるのではなく、教員に指導されたことに忠実にしたがって学習を進める傾向があり、豊かな演奏表現に必要不可欠な楽曲分析についても、分析の結果を実際の演奏に生かしきれないといった課題があると、筆者は日頃指導を行う中で感じている。

このような現状において、常葉大学教育学部初等教育課程では、「学内学会」という学生と教員による研究発表会が開催されている。この「学内学会」は授業外の活動であり、発表参加は任意であるが、様々な分野の研究発表が行われることを想定しており、演奏などの実演を伴った発表も可能である。授業で課題となっている楽曲分析と演奏表現の関わりを追及し、具体的な実践例（実例）を提示することができるため、例年音楽専攻の学生が楽曲分析と解説を伴った演奏発表を行っている。

本稿では、まず本学で行われているピアノ系授業における楽曲分析の活用と現状について考察する。さらに、学内学会での研究発表の様子などから、楽曲分析・解説を伴った演奏発表を行うことのねらいや効果を俯瞰することを通して、音楽科教員養成におけるピアノ指導のあり方についての知見を得ようとするものである。

1.　音楽科教員養成におけるピアノ系授業の現状

1．1　授業の概要・特徴

音楽科教員に必要な知識、技能を身につけるため、音楽専攻では教育職員免許法施行規則第 4 条、第 5 条の備考に示された教科及び教科の指導法に定める科目「ソルフェージュ」「声楽」「器楽」「指揮法」「音楽理論・作曲法及び音楽史」「教科の指導法」に沿った授業を展開している。なかでも音楽科教員に必要不可欠なピアノ演奏技能の修得、向上を目指した授業は、2 年前期から 4 年後期まで継続的に配置され、学習者が長期的目標を持ち、段階的に上達を図ることを目的としている。また、この授業では独自のグレード別テキストを用い、音楽に対する深い知識と素養、豊かな音楽的感性と高いピアノ演奏技能を身につけ、音楽の素晴らしさを伝えることができる音楽教員としての能力、資質の育成を目標としている。グレード別テキストは、グレードⅠ～Ⅳの 4 冊で構成されており、難易度はもちろんのこと、音楽史上の区分によって収録楽曲が分類されている。学習者は、まずこれまでのピアノ学習経験から自身の習熟度に合致しているグレード集を選択し、卒業までの 3 年間でどのような楽曲に取り組み、どのような知識技能等を身に付けたらよいか考え、より高いグレード集に到達することを目指す。このように学生自らが自身の目標を設定し、計画的に学習に取り組むことで、少ない時間の中でより効果的に音楽科教員に必要な演奏能力の上達、豊かな表現力や音楽性を育むことを目指している。

ピアノ演奏能力の修得といっても、単に中学校や高等学校といった実際の教育現場で困らないための演奏技能や知識さえ身に付けていれば良いというわけではない。音楽科教員には、研究を深め、音楽の素晴らしさを伝えていく表現者としての能力や資質、豊かな人間性を有していることが求められる。そのため、このピアノ系授業は、平行して行われている声楽系授業とともに、楽曲理解を深め、自分の思いや意思を他者に向けて表現することの重要性を意識して行われている。授業では、2 年前期から 3 年後期までの各セメスターにおいて、受講者全員に演奏を披露する形の実技試験を行っているほか、授業外や学外での演奏会への参加、企画も推奨し、人前で演奏する経験を積めるよう心がけている。また、音楽専攻では、より高い専門性を身につけることを目指し、3 年次にピアノと声楽のどちらかを自らの専門とする実技として選択するようにしている。4 年後期に開催される卒業演奏会では、各自が選択した専門実技による 10 分程度の演奏発表を行うことになっており、学生たちはこの卒業演奏会という大きな舞台でこれまでの学習の成果を発揮し、楽曲の良さや楽曲に対する自身の思いを聴衆に伝えることを目指して、日ごろから切磋琢磨している。喜びや達成感、悔しさやもどかしさなど、様々な感情と向き合いながら人前で演奏する経験を積むことは、音楽の奥深さ、素晴らしさを実感し、表現することの楽しさや大切さに気づくことであり、教員に必要な豊かな人間性、内面的資質の育成に深く関わっている。

1．2　授業における楽曲分析の活用と課題

より豊かな演奏表現を実現させるには、ピアノ演奏技能向上の他に、演奏楽曲を深く理解することが重要である。ピアノ系授業においては、これまでに学習した理論系科目の知識を確認しつつ、音楽史上の区分や作曲家の特徴、楽曲の構造や形式、調性の変化など様々な要素との関わりから、楽曲解釈の仕方やふさわしい演奏表現について考えることができるよう指導を行っている。前述したグレード別テキストには、それぞれのグレードの特徴、習得

を目指す技能、学習内容のほかに、収録楽曲についての解説が記載されている。そのため、授業ではこのテキストや適宜副教材を用いながら、学生個々の課題曲に対して指導をしている。学生は3年前期までは、テキストに掲載されている楽曲から試験曲を選択するが、3年後期では、テキストの枠にとらわれずに試験曲を選曲することになっている。これは、4年次に行われる卒業試験、卒業演奏会を意識しつつ、これまでの学習の経過と成果から自身が学習するにふさわしい楽曲を考え、その楽曲について自ら調べることにより、主体的に演奏研究を深めていくことをねらいとしているからである。そのため、3 年後期の授業では、自身の課題曲についての楽曲分析のレポートを課し、成績評価の対象としている。また、「音楽理論・作曲法及び音楽史」の区分においては、1年後期の「音楽理論」、2年後期の「楽式論」を経て、「西洋音楽史」と「楽曲分析」の授業が3年前期に配置されており、これらの授業で身につけた知識、能力をこの楽曲分析のレポートに生かせるようにしている。4年次では、ピアノを専門とする学生は卒業試験及び卒業演奏会で演奏する楽曲に 1 年かけて取り組むため、その中間発表的な課題として、前期の授業の中で楽曲の作曲された背景について調べるレポートを課し、声楽を専門とする学生にも自身が学習すべきと考える楽曲に取り組んでもらい、その曲についてのレポートを提出させている。さらに、音楽専攻独自の科目である後期の「音楽総合演習」においては、楽曲分析を取り扱う領域がピアノの領域とは別に配置されているため、その領域の担当教員のもとで、卒業試験、卒業演奏会で演奏する楽曲（声楽主科は声楽曲）についての楽曲分析を行っている。

楽曲分析をすることの目的は様々あるが、このピアノ系授業における楽曲分析の目的は、知識に裏付けられた説得力のあるピアノ演奏表現を実現するところにある。提出を課している楽曲分析のレポートは、学生が自身で調べたり、授業の中で指導を受けたりした内容をまとめるわけだが、どうしても課題提出のためという目的が先に立ち、調べたことを記述するにとどまり、実際の演奏になかなか結びつかないといった現状がみられる。音楽に関すること、とりわけ感覚的な表現について言語化することは、非常に難しいことであるが、楽曲分析は豊かな演奏表現のために必要不可欠であり、分析結果を演奏に生かしていくことが大変重要である。この意識を学生たちに根付かせ、楽曲分析から自身の理想とする表現を導き出すプロセスを踏むことに目を向けることが必要である。また、4年後期の「音楽総合演習」は、ピアノ演奏に関する領域と、声楽に関する領域、楽曲分析の領域、それらを言語化する領域の4つで構成されており、担当教員がそれぞれ異なるため、さらに楽曲分析と演奏を結び付けにくい状況がある。各教員がそれぞれの授業内容や、学生の学習状況を共有し、領域を横断した学びをより効果的に行う工夫が必要である。

2. 常葉大学教育学部初等教育課程学内学会における演奏発表の有用性

2. 1　学内学会の特徴と趣旨

常葉大学教育学部初等教育課程学内学会（以下、「学内学会」）は、研究企画部会によって企画、開催されている事業で、学生と教員が学び合い、研究活動を充実させることを目的としている。これまで研究会やシンポジウムなど、様々な会が催されてきたが、2016 年からは毎年1回「学生及び教員による研究発表会」を開催している。この研究発表会は、一般的な学会発表と同じように、いくつかの分科会に分かれて行われる。しかし、通常は自身が所

属する専門分野の学会で研究発表を行うのが一般的であるのに対し、初等教育課程は、国語、数学、社会、理科、音楽の 5 専攻によって構成されているため、様々な分野の研究発表が一同に行われるところが特徴である。また、所属専攻や卒業研究に関するもののみならず、ボランティアやクラブ活動に関する発表なども可能であるため、その発表内容は多岐にわたる。演奏や演技などの発表も、解説や分析等のアカデミックな要素を取り入れることで実施可能とされており、様々な発表形態や発表内容に対応できるよう柔軟に企画されている。

教員養成校である本課程では、実践的な指導法や児童・生徒理解など、将来教員になった際に有用な知識、スキルの習得に力を注ぐ学生が多いように感じる。大学は教育活動だけでなく、研究活動を行う場でもあり、一つのことを深める姿勢や他者に自分の主張を伝えようとする姿勢は、現場の学校教員に強く求められているものである。様々な分野の研究に触れることにより、見識を深め、研究の意義やすばらしさに気づくことは、将来教員になった際に備えていなければならない資質、能力であり、その育成がこの学内学会の趣旨であるといえる。

2. 2　学内学会における音楽専攻学生の発表について

前述した通り、「学内学会」では実演を伴った発表も可能であるため、音楽専攻からも数名もしくは数組のグループが、毎年実技演奏を伴った発表を行っている。ここでは、令和 3 年度に行われた学内学会における音楽専攻学生の発表の様子から、楽曲分析・解説を伴った演奏発表の効果について述べる。

2. 2. 1　令和 3 年度学内学会の発表内容

令和 3 年度学内学会は、2021 年 11 月 27 日（土）に常葉大学草薙キャンパスで開催され、9 つの分科会において、個人、グループ、併せて 34 の発表が行われた。音楽専攻からは 4 名と 2 組のグループが演奏を伴う発表を行った。音楽専攻発表者の発表概要は以下の通りである。

表 1　発表タイトルと形態（令和 3 年度、音楽専攻）

学年	形態	タイトル
3 年生	個人	ショパンのエチュードの特質と演奏法の考察　～《Op.10-1》の演奏を用いて～
3 年生	グループ	フランク作曲《ヴァイオリンとピアノのためのソナタ第 4 楽章》の鑑賞教材としての魅力について［楽曲分析及び演奏発表］
4 年生	個人	F.リスト作曲「メフィスト・ワルツ 第 1 番」における演奏表現の考察と実演
4 年生	個人	ペダルの効果を最大限に活かしたペダルの踏み方とその効果
4 年生	個人	プロコフィエフ作曲　ピアノソナタ第 3 番　イ短調「古い手帳から」Op.28 の楽曲分析及び演奏 ～プロコフィエフの音の響きとは～
4 年生	グループ	合唱曲「結」の楽曲分析を活かした演奏

学内学会では、自身が取り組んでいる楽曲についての演奏発表はもちろんのこと、音楽指導に関する実践的な研究、生演奏を取り入れた授業提案など、これまで様々な発表が行われてきた。しかし、学内学会は例年 11 月下旬～12 月上旬に開催されることから、特に 4 年生にとっては、11 月初旬に大学祭で行われる学内演奏会に続き、1 月の卒業試験、2 月の卒業演奏会を前にした貴重な演奏機会として認識されており、教員も積極的に参加を勧めている。したがって、卒業試験、卒業演奏会で演奏する楽曲について、楽曲分析・解説を行い、最後に通して演奏するという形の発表で参加する学生が特に多い。今回も 4 年生はいずれも卒業演奏会で演奏する楽曲に関連した発表を行っており、6 つすべての発表で何らかの楽曲分析が行われ、最後にその分析や研究を生かした演奏を発表する形であった。

2．2．2　発表学生の様子からみえる活動の効果

いずれの発表も、構造や楽曲を特徴づけている要素等に着目して分析をし、その分析からどのような演奏をすべきか、言葉と演奏で主張していくものであった。そのため、分析して終わりではなく、そこから導き出した表現方法を聴き手が納得するように演奏で伝えなければならないという意識を強く持って臨んでいる様子が窺えた。頭ではわかっていても、普段の練習では技術的な課題や他に気をつけなければならない様々な課題など、広範囲に意識が向いてしまい、中途半端になってしまいがちだが、選択した箇所や要素等について深く掘り下げることにより、説得力ある理想の表現を突きつめようとする姿勢を感じ取ることができた。また、発表までの準備段階においては、他者にわかりやすく伝えることを意識することで、自身が理想とする演奏表現のイメージを作り上げていく学生の様子もみられた。このように、楽曲分析を生かした演奏表現を追求することに焦点を置いた活動は、ピアノ演奏技能の修得・向上においても、豊かな表現力の育成や研究を深める姿勢といった内面的な成長においても良い効果をもたらすことができると考えられる。

学生の発表では、最初は戸惑いと緊張で硬い表情がみられたが、いざ話始めると自身の考えを伝えようと、必死になってのめりこんでいる姿がとても印象的であった。その後に披露された演奏も、技能面など様々な課題はもちろんあるが、非常に堂々としていて、訴えたいこと、表現したい思いが全面に表われた魅力ある演奏であった。発表者に発表後、感想を聞いてみると「単に卒業演奏会のために発表した方が良いと思って参加したが、実際に発表してみたらとても楽しかった。」「最初はそれほど乗り気でなかったが、発表して良かった。」「すごく集中した。発表してすっきりした。」など興奮気味に話す様子がみられた。演奏会や発表会といった機会は他にもあるが、このように楽曲分析などの理論的部分の発表を関連付けて演奏する舞台はそうはなく、このような機会は学生にとって非常に貴重で有益なものであるといえる。

まとめ

これまで 6 年に渡り、学内学会では楽曲分析・解説を伴った演奏発表が行われてきた。学生たちはこのような形の発表に慣れていないため、研究や準備に大変な労力を要しているが、発表の様子やその後の成長の様子から、筆者はこれらの発表がピアノ演奏技能の上達や表現力を高める効果があることを実感してきた。豊かな演奏表現の実現には、確かな演奏テ

クニックのほかに、豊かな音楽性と深い知識をもとに根拠ある理想の表現方法を追求し、それを他者に伝えようとする表現力が必要である。そのためには、まず楽曲を理解する知識や分析力といった土台を作るための学習を積み重ねること、そして自身で分析をし、その結果を演奏に反映させる実践的な経験を持つことが重要である。地道な練習ももちろん大切であるが、聴衆がいる舞台で披露するたった一度の演奏がもたらす学習の効果は非常に大きい。楽曲の良さや楽曲に込められた様々な思いを他者に伝えることが演奏表現の本質、意義であり、音楽科教員が備えていなければならない重要な資質である。今回論じた学内学会における演奏発表は、まさにこのような経験、学習をするのに適した機会であり、多くの可能性を有している。今後、学内学会発表後の学生の楽曲分析活用の様子や卒業演奏会への効果など、さらに長い目を以て考察していく必要があると考える。

また、学内学会は授業外の活動であるため、今回の発表の準備は全て授業外で行われ、授業担当教員やゼミの指導教員が相談に乗り、指導を行った。授業やゼミの枠を超えて、学生と教員が連帯感を持って様々な行事に取り組むのは、豊かな表現力や人間性の育成を目標としている「音楽」という実技教科に関する専攻ならではのことであり、少人数で個々の指導に力を注ぐことができる音楽専攻の良さの一つである。このように、効果的な授業内容や方法を考えるだけでなく、授業外の様々な活動の可能性を視野に入れ、一致団結して目標を達成できるよう取り組むことも音楽科教員養成において求められる姿ではないかと考える。一方で、同じく中等科音楽の教員養成課程を有している音楽大学の学生は、自身が演奏発表できる場を求めて自らオーディションやコンクール、セミナー等を受けるなどの活動を行うのに対し、本学の音楽専攻の学生は、教員からの声掛けがなければ、なかなか自発的に参加の声を挙げない傾向がみられる。将来教員として音楽の素晴らしさや表現することの楽しさを伝えていく立場として、自分自身に自信を持ち、人前で演奏することを熱望するような前向きな姿勢で音楽と関われるよう、より効果的な活動や授業実践について考えていきたい。

引用・参考文献

鎌田公寿（2017）「2016 年度　初等教育課程学内学会報告」『常葉初等教育研究』第 2 号
古市将樹（2018）「2017 年度　初等教育課程学内学会報告」『常葉初等教育研究』第 3 号
明和史佳、稲田礼子、海瀬京子（2017）「グレード別テキストを用いたピアノ演奏表現・技能向上の実践―中等音楽教員に求められるピアノ演奏能力とは―」『常葉大学教育学部紀要』第 38 号、pp.227-250
文部科学省（2017）『中学校学習指導要領（平成 29 年 3 月告示）』東山書房
山﨑正監修、明和史佳編著（2017）「中等教員養成のための　ピアノ演奏表現・技能の実践グレードⅠ～Ⅳ」篠原印刷出版部

謝辞

本研究にご協力いただいた、令和 3 年度常葉大学教育学部初等教育課程学内学会発表者の音楽専攻学生の皆さんに心より感謝申し上げます。

《授業提案》

中学校の音楽鑑賞教材に対する様々なアプローチ
―スメタナ《我が祖国》〈ブルタバ〉を例に―

太田　暁子*

序

2020 年以降のコロナ禍において，音楽の授業は特に大きな打撃を受け，授業の手法も大きな変更を余儀なくされることとなった。しかしその一方で比較的影響を受けにくかったのが音楽鑑賞である。そこで今回，授業において音楽鑑賞の割合が大きくなる可能性も視野に入れ，改めて鑑賞教材についてより多くの局面からアプローチし，ひいては授業実践に繋げられるように考えたい。本稿では，中学校の鑑賞教材として取り上げられている，ベドルジフ・スメタナ Bedřich Smetana（1824–1884）作曲の連作交響詩《我が祖国》より第 2 曲〈ブルタバ〉について，教科書の比較，作曲家について，鑑賞音源について，授業実践について等，さまざまな視点から考察を行っていく。

1. スメタナ作曲　連作交響詩《我が祖国》〈ブルタバ〉　各教科書の特徴

スメタナ作曲〈ブルタバ〉は，音楽鑑賞教材として中学校の音楽の教科書「2・3 下」に掲載されている曲である。教育出版，教育芸術社ともに掲載している教材だが，各社の紙面への表れ方にそれぞれ特徴がある。

1-1. 教育出版「音楽のおくりもの　中学音楽 2・3 下」

教育出版の教科書では，〈ブルタバ〉を 5 ページにわたって扱っている。冒頭にブルタバ川に架かるカレル橋付近の写真，現在のヨーロッパ地図，楽曲の説明，交響詩の説明が施されている。

教育出版では教科書本体に加え，インターネット上のウェブサイト『まなびリンク』を公開することで，教科書や紙媒体には掲載しきれない学習に役立つ情報を補い，家庭学習時などに使用できるよう配慮されている。まなびリンクの「ブルタバ（モルダウ）」は，曲中の標題ごとのテーマの音源と，ワークシートの二種で構成されている。教科書には曲中の標題と該当旋律の冒頭が五線譜で掲載されているのに対し，まなびリンクの方には該当箇所の音源をアップしてあり，教科書の譜例とサイトの音源を併用して学習できるようになっている。また，サイトからワークシートをダウンロードし，主題ごとの感想と曲の良さを紹介する文を記入・署名して教員に提出できるようにもなっている。一方教科書本体にも「聴き取ったり気づいたりしたことを記録しておこう」という欄が 3 箇所あり，そのスペースだけでも合わせて 1 ページ程度の量が割かれている。一見重複するように思われるが，実際は教科書本体に生徒が感想を書き込んでも教科書そのものを教員に提出するわけにはいかないため，提出用のワークシートを別に用意することにも意味がある。

ただし交響詩の説明には「自然や文学的な内容などを，オーケストラを用いて自由な形で描く音楽のこと」とあるが，これでは，日常標題音楽に慣れていて，かつ「オーケストラの

---

* 常葉大学非常勤講師，東京音楽大学非常勤講師

曲＝交響曲」と捉えがちな中学生にとって，交響詩と交響曲との違いは認識しにくい。従って作曲当時は既存の交響曲の形式にとらわれない交響詩の手法が画期的であったと授業で添えると，教科書の説明がさらに理解されやすくなると考えられる。

この曲に割かれた 5 ページという分量は，教科書においては多めとも言えるものの，その割に文章はさほど多くない。各主題を演奏するメインの楽器の演奏写真を付けるなど，まずは音楽を聴くという音楽鑑賞の原点に忠実であろうとする意図がしっかりと感じられる構成になっている。そして作曲者スメタナについてと，スメタナ自身が寄せた曲の解説の邦訳を 5 ページ目の下半分，つまり最後に掲載していることも大きな特徴である。

1-2 教育芸術社「中学生の音楽　2・3 下」

教育芸術社の教科書では〈ブルタバ〉に 3 ページが充てられている。冒頭見開き 2 ページで楽曲について，スメタナについて，作曲当時と現在のヨーロッパの地図，カレル橋付近の写真，曲に寄せる作曲者の解説の邦訳など，その内容は非常に多岐に渡る。加えてページ下部の小欄「＋α」によって，〈ブルタバ〉が作曲されたころに日本では福沢諭吉『学問のすゝめ』が刊行されたという情報を添えるなど，さまざまな視点や角度から楽曲を捉えさせようとする意図が感じられる。またコラム「受け継がれる祖国への思い」には，スメタナの命日である 5 月 12 日に毎年「プラハの春」音楽祭が開催され，オープニングで《我が祖国》が必ず演奏される旨の説明と，音楽祭の会場である市民会館（スメタナホール）の写真も載っている。生徒は音楽祭への興味を強くそそられるとともに，今も曲の歴史が脈々と受け継がれていることを実感できるだろう。

さらに，チェコの代表的画家アルフォンス・ミュシャ Alfons Maria Mucha（1860–1939）の〈スラヴ民族の神格化〉の写真も掲載されている。この作品は，祖国の伝説や歴史をつづった作品群《スラヴ叙事詩》の一部であり，ミュシャがその制作時に《我が祖国》を聴いて強く感銘を受けたという説明が添えられている。このように美術について言及していることは本書の大きな特徴であり，音楽と他芸術との関わりについて理解させるのに大きな手助けになると言えよう。そして音楽が美術作品の制作に影響を与えたことを知れば，同テーマを音楽以外の領域で表現する可能性について考えることが出来る。

3 ページ目では〈ブルタバ〉内の各主題をスメタナ自身がつけた標題とともに冒頭のみ五線譜で掲載し，各々に主題の演奏楽器を付記している。教育芸術社も教科書に掲載の QR コードからアクセスできるインターネット上のコンテンツを公開しており，〈ブルタバ〉の 2 ページ目の右下部に「チェコについて」と題した QR コードから外部サイトである外務省のホームページ「チェコ共和国」へアクセスできるようになっている。

2. スメタナについて

スメタナはボヘミアのリトミシュルに生まれ，プラハで没した。ボヘミア初の国民的大作曲家であると同時に，国民楽派の一人としても非常に重要な存在である。

スメタナが生まれた当時，オーストリア帝国支配下のボヘミアでは公用語がドイツ語であったため，彼自身はチェコ語を話すことも書くこともできないまま育った。しかし，1848 年にヨーロッパ各所で起きた一連の革命がウィーン体制を終わらせ，ボヘミアにも大きな

影響を及ぼすこととなる。6 月 11 日の労働者蜂起にスメタナも国民義勇軍の一員として参加したものの，結局この蜂起はオーストリア軍に鎮圧されてしまった。

祖国が依然オーストリアの支配から脱することができない上に，当時のスメタナは音楽活動も経済事情も思わしくなかった。この状態を打開すべくスウェーデンに渡り，1856 年からはイェーテボリで指揮やピアノの教授，作曲活動などを精力的に行った。しかしその一方でオーストリア軍の弱体化にともない，祖国チェコで国民的な音楽活動の新計画（国民音楽コンクールの開催，チェコ演劇やオペラ用の仮劇場の建設など）が次々と発表されると一転，自身も祖国で愛国的な音楽活動を行うため，1861 年にプラハへと戻ったのである。

連作交響詩《我が祖国》の第 1 曲〈ヴィシェフラド〉は 1872 年に構想され，1874 年に完成して翌年初演，続く〈ブルタバ〉〈シャールカ〉〈ボヘミアの森と草原から〉までは 1 曲ごとに，そして〈ターボル〉〈ブラニーク〉は 1880 年に 2 曲同時に初演された。だが〈ヴィシェフラド〉完成前から健康状態は悪化し，ほどなくして聴覚を失っている。

1872 年に構想を始め 1879 年に終曲〈ブラニーク〉の完成をみたことを考えると，1884 年に没したスメタナにとって《我が祖国》は晩年の集大成と言ってよいだろう。彼自身は完成した作品の音を満足に聴くことは出来なかったが，以降もこの曲は間違いなくボヘミアを，そしてチェコを象徴する楽曲として繰り返し演奏されるようになった。

この作品が作られる原動力となったのはボヘミア王国の不安定さだったのだが，スメタナ没後も更にこの地域は周辺諸国に翻弄され続け，国家としての不安定さは続いていく。しかしそのことによって，かえって《我が祖国》は民族および国家としてのボヘミアのアイデンティティーを象徴する曲となり，より強固な存在となっていった。

3. 授業で使用する鑑賞音源の選定　―作品をより深く知るために―

ここでは，音楽の特徴とその背景となる文化や歴史の理解を更に深めることができると思われる鑑賞教材の音源の例について考えてみたい。本稿では特にテーマ性を強く持つ音源の一例として，チェコ出身で国際的に活躍した指揮者であるラファエル・クーベリック Rafael Jeronỳm Kubelík（1914–1996）が 1990 年の「プラハの春」オープニング・コンサートでチェコ・フィルハーモニー管弦楽団（以下チェコ・フィル）と共演した演奏を紹介する。

スメタナの没後，オーストリア・ハンガリー帝国が 1918 年に崩壊してチェコスロヴァキア共和国が独立した。しかしチェコとスロヴァキアが合わさった国家はバランスを欠いており，実質的に政治的な実権を握ったチェコに対してスロヴァキアが反発して親ドイツとなったことで，チェコとスロヴァキア両地域の対立は深まった。やがてドイツはナチス政権に代わり，1938 年から 1939 年にかけてチェコスロヴァキアはナチスに解体されてしまう。やがて第二次世界大戦終結後にチェコスロヴァキアは復活したが，最終的にチェコスロヴァキアをドイツから解放したのがソヴィエト社会主義共和国連邦（以下旧ソ連）軍だったことから，チェコスロヴァキアは旧ソ連の強い影響力のもとに，共産主義国家への道を急速に歩み始めることとなった。こうしたチェコスロヴァキアの共産主義化に反発してイギリスに亡命した指揮者が，クーベリックである。

クーベリックは，オーストリア・ハンガリー帝国支配下のボヘミアに生まれ，ヴァイオリニストである父から大きな影響を受けて育った。1934 年にチェコ・フィルを指揮してデビ

ュー，1942 年には同楽団の首席指揮者となるが， 1948 年にチェコスロヴァキアが共産主義体制となったことに反発し，同年エジンバラ音楽祭へ参加するために家族を伴って渡英したまま，イギリスに亡命した。

以降は西ヨーロッパやアメリカを拠点に演奏活動を行い，多くの録音も残している。1973 年にはスイス国籍を取得し，精力的な音楽活動を続けていたが，1986 年に持病が悪化したことを理由に引退を表明した。しかし，この後に奇跡が起きる。

1989 年 11 月 17 日にプラハで民主化革命が起き，デモ隊と公安部が衝突したと報じられると，すぐさまクーベリックはチューリヒのテレビで 2 回コメントをした。その直後，チェコ・フィルと「プラハの春」音楽祭実行委員会から招聘を受け，翌 1990 年チェコ・フィルの《我が祖国》を指揮して歴史的成功を収めた。クーベリックは，音楽活動を実に 42 年ぶりに帰国した祖国で再開させたのである。

この際，チェコ・フィルより終身名誉指揮者の称号を受けたが，当時を記録した DVD が市販されている。内容は《我が祖国》を含む音楽祭オープニング・コンサートのライヴ映像と，そのリハーサル風景やリハーサルの合間に収録したクーベリック自身のコメントがセットになって収録されている。その中に亡命当時のことを語った以下のくだりがある。

> 私は未来のことも過去のことも信じない男です。信じるのはこの時点とこの場所だけです。（中略）そう考えられれば，いつでもそこに存在できます。それが支えとなって困難も乗り越えられます。もちろん祖国は大事です。でも私の場合は，あの当時，政治的な流れに乗っていたら，全ての友人や国民を裏切ったことになったでしょう。それが分かっていたから，出たんです。だから祖国への郷愁に耐えたのです。
>
> （クーベリック 1990, Tr.2, 00:35:02–00:35:57）

> 私は信じます。未来はきっと調和のとれた，道徳的で力強い社会であろうと。
>
> （クーベリック 1990, Tr.2, 00:51:21–00:51:28）

「未来」というのは，1990 年のインタビュー時点での未来である。当時のプラハは物価が上がり，治安も良くなかったが，ようやく未来の明るい兆しが見え始めた頃に開かれた音楽祭であった。結局その後もチェコとスロヴァキアの溝は埋まらず，1993 年にチェコ共和国，スロヴァキア共和国の 2 国として独立し，現在に至っている。

政治的な理由で祖国を捨てて外国に拠点を移す心境は，ほとんどの日本の中学生には実感が湧かないであろうし，むろんその方が平和で理想的である。だが歴史的視点を踏まえてこの音源を教材に選び，諸国の事情と音楽の役割を考えるきっかけとする価値は充分にある。ちなみにクーベリックは同 DVD に収録されたリハーサル映像で，音が何を表しているのかをオーケストラに具体的に説明しており，教科書に掲載された標題を演奏で具現化する手法も鑑賞できる。

4. 〈ブルタバ〉へのさらなるアプローチ ―授業実戦での経験から―

中学校の授業で〈ブルタバ〉を鑑賞教材として扱う際，教科書のアプローチに沿う方法もあるが，筆者はまた違ったアプローチを授業で実践した経験がある。それは，昨今鑑賞教材

の素材が映像や写真のようなビジュアルを伴ったものが多いのに対し，逆に映像等を用いずに音だけの鑑賞に集中させるよう試みたものである。

4-1. 楽器当てクイズ

最初に特に何の説明もせず，これから流す演奏には何の楽器が使われているのか，聴き取ることのできた楽器を書き取るよう指示し，〈ブルタバ〉の音源を流す。その際，あえて映像教材を用意し，一回目は映像をオフにしてクイズの問題として鑑賞させ，種明かしをする時に同じ音源で映像をオンにして鑑賞させる。これはオーケストラの使用楽器について学習済みの場合には復習になり，これから学習する場合には導入となる。

曲を繰り返し流すことにはなるが，音楽は一度だけ聴いても忘れがちであるし，音楽鑑賞の意義は「あぁ，あの曲だ」と分かるくらい繰り返し聴くことにもある。

またこの場合は全曲通しての鑑賞にこだわらず，途中で切るという方法もある。

4-2. 標題クイズ

最初に特に説明はせず，これから流す曲には何らかのテーマが描かれているということのみを伝える。曲を鑑賞しながら，そのテーマや表現の内容が何かを生徒が各自で想像し，文章や絵で自由に表現するよう指示をする。〈ブルタバ〉の演奏時間は 13 分程度しかなく，概ね一回の鑑賞では作業が終わらないので，二回程度鑑賞させることにはなるが，課題提出後に種明かしのような形で，スメタナが掲げた標題や主題となるメロディーを示すと理解が早い。曲本来の標題から外れたり，学習後に自分の想像と作曲者の意図とが混ざったりする可能性もあるが，まず先入観なく音楽に集中し，自主的に曲を聴くことを通じて想像力をかき立てるのも，音楽鑑賞における貴重な体験であろうと思われる。また，課題の表現方法が音楽以外の芸術表現にも渡っていることから，音楽の教員にとっては個々の生徒の新たな一面を発見できる良い機会でもある。

結び

授業において同じ内容を説明する場合でも，言い方によって印象は全く異なる。たとえばスメタナであれベートーヴェンであれ「聴覚を失った」ことを説明する場合，ただ耳が聞こえなくなったというだけではなく，「耳が聞こえなかった，つまり完成した自作の楽曲を自分で聴くことが出来なかった」と伝えることで，「音楽家が聴力を失う」ということの意味を音楽家の立場になって想像しやすくなるだろう。また，祖国を標題とする曲について説明をする場合でも，もし現在の日本の中学生が曲を作る時に，例えば真っ先にタイトルを「我が国，日本」にしようと考えるだろうか，もしそうでないなら，どのような場合にそうすべきだと感じるのだろうか，このように生徒に一旦問いかけ，作曲者の立場や，作曲当時の状況への理解を促すことも重要だと考える。

さらに言えば，日本では〈ブルタバ〉は《我が祖国》という邦題が定着している一方で，英語による曲名は「My Country」である。このことに関して，2019 年に来日してチェコ・フィルで《我が祖国》の指揮をしたセミヨン・ビシュコフ Semyon Bychkov（1952–）は，公演へ向けてのインタビューで以下のように語った。

英語では，よく「わが国」と訳されていますが，それは少し違っていて，「わが祖国」が正しいと思います。フランス語では，Patrie（祖国），イタリア語ではPatria（祖国），ロシアではMotherland［ママ］（母国），ドイツでは，Fatherland［ママ］（父祖の国）と訳されるように，つまり皆にとっての祖国，また，こうあって欲しいと思う国の姿についての曲なのです。私達皆が愛する唯一の祖国のことであるからこそ，大変普遍的な作品なのです。

（JAPAN ARTS 2019）

この発言は，ビシュコフ自身が旧ソ連からアメリカへの亡命者であることも背景にあるかもしれない。しかし確かに「祖国」を「国家」というよりむしろ「故郷」であると解釈することによって，《我が祖国》はスメタナやクーベリックのように祖国が政治体制によって翻弄された背景を持つ人々のみならず，日本の中学生，そしてあらゆる人々に共通する思いを投影できる作品であると言えるだろう。

スメタナは後のクーベリックの存在はおろか，後に自分の作品や祖国がどのような運命を辿ることになるのかについても知るべくはない。しかしどの芸術においても作者が作品を完成させた時点に作品が留まるわけではなく，特に音楽は演奏され，鑑賞され，探究され，思いを馳せられることによって新たな魂が吹き込まれ，時空を超えて生き続けるのである。現在，生徒たちが音楽を鑑賞することによって，まさに生徒たち自身がその曲を生かし続け，それらの芸術を生かす歴史の最先端に生徒達自身が存在しているのだということを伝えることができたなら，それは何より理想的な音楽の授業の形となるのではないだろうか。

参考文献

小原光一，飯沼信義，浦田健次郎（監修）　2021　『中学生の音楽２・３下』　東京：教育芸術社

新実徳英（監修）　2021　『音楽のおくりもの　中学音楽２・３下』　東京：教育出版

関根日出男　1990　「《プラハの春》音楽祭'90」　音楽之友社『音楽の友』　第48巻　第7号：15–21

牛山充，田村進，渡鏡子　1982　「スメタナ」　『音楽大事典』　第3巻　東京：平凡社

John Clapham　（佐川吉男，関根日出男，内藤久子　訳）　1994　「スメタナ・ベドジフ」　『ニューグローヴ世界音楽大事典』　第9巻　東京：講談社

参考ウェブサイト

教育芸術社　「中学生の音楽　中学生の器楽」　https://textbook.kyogei.co.jp/r3_jhs/　（2021年12月20日閲覧）

教育出版　「中学音楽　音楽のおくりもの　２・３下」（『まなびリンク』ウェブサイト内）　https://www.kyoiku-shuppan.co.jp/ml-jh/ongaku/23g.html　（2021年12月20日閲覧）

JAPAN ARTS　［2019］「セミヨン・ビシュコフ スメタナ「わが祖国」を熱く語る！【チェコ・フィルハーモニー管弦楽団】」　https://www.japanarts.co.jp/news/p4219/（2021年12月20日閲覧）

視聴覚資料

クーベリック，ラファエル（指揮）　1990　『クーベリック／我が祖国（1990年プラハ・ライブ）＋祖国との再会（ドキュメント）』　DENON: COBO-4325, 1990, DVD.

《授業提案》

M.R.S.理論に根差したソルフェージュ教材の提案

三沢　大樹[1]　　髙山　理未[2]　　松浦　杏[2]　　八木　瑞希[2]

１．はじめに

音楽科教育Ⅳ（教科の指導法／２単位）は「我が国の音楽科教育における今日的課題に関して複数の角度から見聞を広め，音楽科教員として常に課題意識を持ち，解決していこうとする意欲や態度を涵養する」ことを目的とした４年次開講の科目である。国内外の優れた音楽教育法や実践事例の概要を学び，その教授法等を応用して，学校教育への活用が期待できる教材を作成することを協働学修の課題として設けている。今回筆者らは，嘗て音楽教育者・作曲家の藤澤孚（以下，藤澤）が提案した M.R.S.理論に根差したソルフェージュ教材の開発を試みた。本小稿では，藤澤の教則本『M.R.S.ソルフェージュ』に対する俯瞰的な分析を行い，実際に作成した教材を提示することで，学校教育への活用を提案するものである。

２．M.R.S.理論について（概要）

一般に，読譜が苦手な人であっても，自分の好きな歌に関しては，意外な程上手に，高度な音型を歌うことが出来る場合がある。M.R.S.とは Memory Return-back（記憶呼び戻し）System のことで，記憶している歌の中の音型を抽出し，それをドリルしていくことで音と楽譜を結合していくという考え方である（藤澤，1985）。教則本は 23 課程で構成され，各課程には文部省唱歌や童謡等のよく知られる楽曲が配置されている。「基本的な授業の進め方」としては，①階名でリズム唱，②階名唱，③M・R 練習（図１），④歌唱練習，⑤聴音書き取り練習の学習が順に展開される。メカニズムとしては，部分的な音程の階名唱（③）や，類似した音型の歌唱（④）の練習を通して，音と楽譜との一体化をねらいとしている。なお，相対音感の育成を基盤に置いているため，階名唱（移動ド唱法）が採用されている。

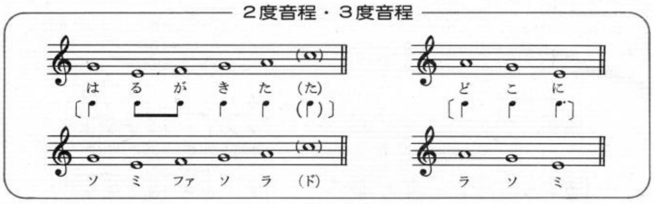


図 1　課程１《春がきた》より「M・R 練習（③)」(藤澤, 1985, p.9)

３．M.R.S.理論に根差した教材の作成

今回は中学校音楽科での活用を想定し，検定教科書に掲載された楽曲３曲を使用した。各教材には，学習指導要領の〔共通事項〕に関して焦点を当てる事項や内容を設定している。

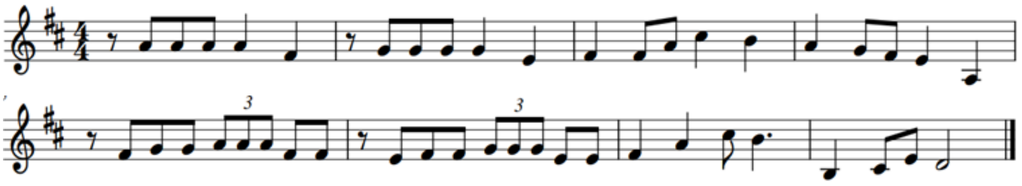
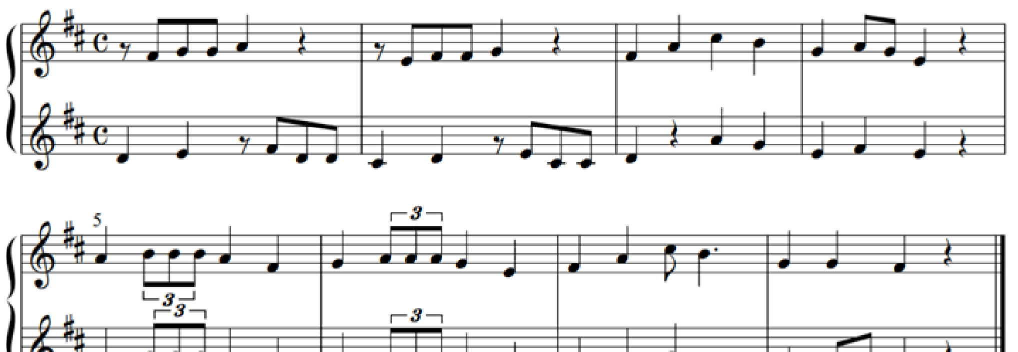
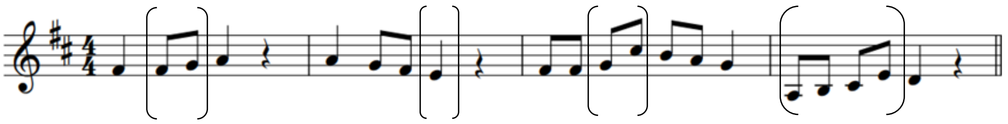
３．１　《夏の思い出》

《夏の思い出》は，江間章子作詞，中田喜直作曲の歌唱曲で，中学校学習指導要領において共通教材として指定されている。ニ長調，二部形式の同声二部合唱の楽曲である。この楽曲の魅力は，歌詞に表された情景の美しさや季節感，そしてその歌詞の詩情を引き立てる旋律の動きの繊細な美しさにある（早川，2019）。楽曲の主な特徴として，「三連符が１箇所登

[1] 常葉大学教育学部　[2] 常葉大学学生

場すること」「二声となる部分の大半が，３度のハーモニーで進行すること」「歌詞のある最後の一小節が，抒情的な雰囲気を持つ終止形であること」が挙げられる。教材作成にあたり，これらの特徴を生かしたものとなるように心掛けた。特に今回は「終止形」を重視し，ひとつひとつの和音を理解することで，自分の歌声が和音の一部であるという意識を持たせることをねらいとしている。本教材では，学習指導要領〔共通事項〕に示された「ア 音楽を形づくっている要素」の「リズム」「旋律」と，「イ 用語や記号など」の「和音」を扱う。

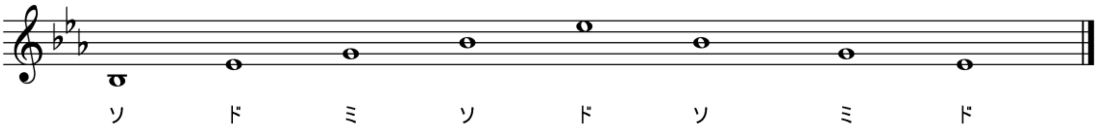
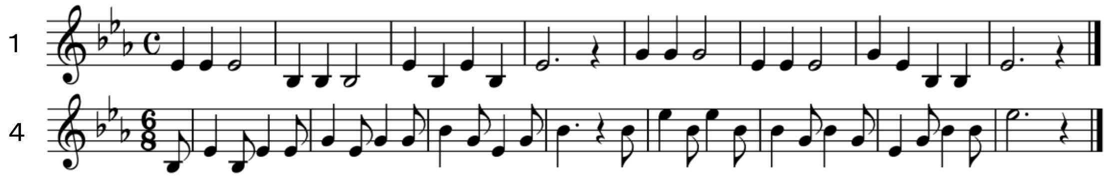
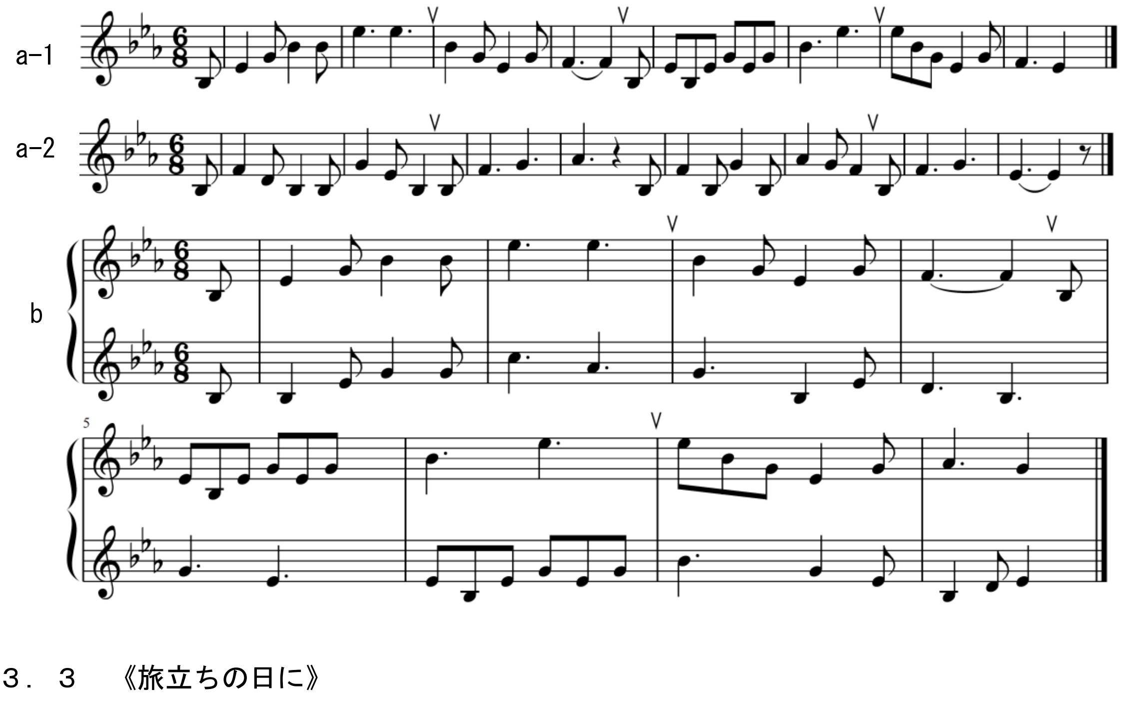
まず，練習１では階名でリズム唱を，練習２では階名唱（移動ド唱法）を行う。この斉唱や練習１・２では音程の正確さにはあまり注目せず，この楽曲の学習の記憶を呼び起こすことを主な目的として行う。練習３ではＭ・Ｒ練習を行う。この練習以降では，Ｍ・Ｒ部分を活用して進める。今回は歌詞の最後の部分にある「遠い空」をＭ・Ｒ部分とし，「終止形」と「和音」を学習内容として設定した。ここでは練習１・２とは異なり，１音１音の音程が正確にとれるようになるよう，学習を進めていく。Ｍ・Ｒ練習は，①移動ド唱法且つ同一音価での歌唱，②「遠い空」の部分の和音の確認，③歌詞且つ同一音価での歌唱，の順に学習を進行する。練習４では，Ｍ・Ｒ部分をもとにして作成したオリジナルの楽譜を用いる。ここでも移動ド唱法を用いる。練習３で設定した学習内容に「三連符のリズム」を加えて，それらを活用したａ・ｂの２曲を順に練習する。ａでは「終止形」と「三連符のリズム」の学習に加えて，楽曲の特徴である弱起で始まるモティーフを取り入れることで，三連符以外の練習にもなるよう心がけた（譜例１）。ｂでは，更に「３度のハーモニー」を加えて，楽曲の特徴３点の全てを学習する。ａとは異なり二声で歌唱する。掛け合いとハーモニーの２つの構成を含むことで，二声の響きの豊かさを味わいながら練習できるよう工夫した（譜例２）。練習５の聴音書き取り練習に関しても，楽曲の特徴を踏まえたものとなるよう作成した。譜例３は，その課題曲と解答である。書き取り（聴き取り）の箇所は括弧で示している。

譜例１　原曲に類似した音型による歌唱課題（練習４ａ）

譜例２　原曲に類似した音型による歌唱課題（練習４ｂ）

譜例３　原曲に類似した音型による聴音書き取り課題

３．２　《早春賦》

《早春賦》は，1913 年に吉丸一昌が作詞，中田章が作曲した楽曲で，中学校学習指導要領において共通教材として指定されている。変ホ長調（原調ヘ長調），八分の六拍子，速度は八分音符＝116 という，前向きな流れを持った曲想である。跳躍進行が多く，最も幅広い音程は短７度である。歌い出しから，１オクターブを超える音域内で跳躍音程の連続があることから，声楽のトレーニングを受けた者でない限り，音と音との間にポルタメントがかかってしまう状況が見られる。筆者にも苦労した経験があり，現在の中学生も正しい音程で歌うことに苦労していることが推察される。そこで，ハンドサインを使って音程の幅を確認しながら階名唱をしたり，特に音程が取り辛い跳躍の部分だけ取り出したりして，移動ド唱を実践する教材として適していると考えた。教材作成に当たり，ワンポイント・メモとして，八分の六拍子の流れを感じて歌うこと，３度と４度の跳躍に気を付けて歌うことの２点を設定した。これは学習指導要領〔共通事項〕に示された「ア　音楽を形づくっている要素」の「リズム」と「旋律」，「イ　用語や記号など」の「拍」と「拍子」に当たる。中学校の授業時数や学習段階に配慮し，上述の「基本的な授業の進め方」の①階名でリズム唱及び⑤聴音書き取り練習は省略し，ハンドサインを使った階名唱やレベル別歌唱練習を取り入れている。

練習１で全体による階名唱（移動ド唱法）を行った後，練習２ではＭ・Ｒ練習を行う。ここでは冒頭の１小節部分にあたる「春は名の」の部分を取り出している（譜例４）。Ｍ・Ｒ練習では，ワンポイント・メモで挙げた３度と４度の跳躍を中心とした練習を行う。跳躍の幅が比較的広いため，主音（Do），第３音（Mi），属音（Sol）の３種類のハンドサインを用いて音程の幅を意識させる。この練習のねらいは，音を十分に保ち，音程を１音１音確認しながら歌うことである。練習３は，ハンドサインを用いながら歌うトレーニングである。３度や４度の跳躍の上の音は，声に出さず，ハンドサインだけ示して頭の中で歌う。ここでのねらいは，主に内的聴感の育成にある。練習４は，手拍子をしながら歌うトレーニングである。ここでのねらいは，八分の六拍子の流れを感じて歌うことであるが，併せて副教材として作成したレベル別歌唱練習を行う（譜例５）。副教材は，基本となる「Do Mi Sol」の３音を使用した４段階の小楽曲である。レベル１は連打が多く歌いやすい音域によるもの，レベル２は比較的歌いにくい高い音程で且つ連打も含むもの，レベル３は広い音域によるもの，レベル４は原曲と同じ八分の六拍子であり，リズムは四分音符と八分音符が主体で，冒頭１小節のリズムと跳躍を意識したものとなっている。レベル別歌唱練習は，授業の導入や歌唱のウォーミングアップ等に活用することができ，レベル別の課題によって短時間で取り組むことが可能となるように設計をした。練習５は歌唱練習であるが，特に苦労する２箇所に着目している（譜例６）。a−1 では，冒頭４小節の「春は名のみの風の寒さや」の部分に類似した音型を用いている。ここでのねらいは，上行と下行の繰り返しでも跳躍の幅を意識して音程を外さないように歌うことである。a−2 は，9—12 小節目の「時にあらずと声も立てず」

の部分に類似した音型である。階名で示すと「Sol Re Sol Mi Sol Fa Mi Re」となるが，毎回「Sol」の音程を正確に保つことが難しく，短７度の跳躍もあることから，楽曲中でも特に難しい箇所に当たる。ここでのねらいは，繰り返し跳躍される音程を正確に保つことができるようになることである。一方で，b は合唱となっている。これはチャレンジ課題として設定した。時間に余裕がある時，高いレベルで仕上げたい時に扱うことを前提とした。ここでのねらいは，互いのパートを聴き合いながらハーモニーを作ることである。

譜例４　部分的な音程の階名唱（M・R 練習）

譜例５　レベル別歌唱練習（練習４）の例

譜例６　原曲に類似した音型による歌唱課題（練習５）

３．３　《旅立ちの日に》

本楽曲は，「中学生の音楽　２・３年下（教育芸術社)」,「中学音楽　２・３年下 音楽のおくりもの（教育出版)」の教科書に掲載されている，変ロ長調，四分の四拍子，混声三部合唱の楽曲である。1991 年，埼玉県秩父市立影森中学校校長の小嶋登が作詞，音楽教諭の坂本浩美が作曲し，卒業する生徒達に向けて創作された。その後，松井孝夫によって混声三部

合唱に編曲され，現在卒業式の歌として広く知られている。本楽曲の特徴として，順次進行とアウフタクトが使われていること，２声，３声になる部分で３度のハーモニーが多く登場することが挙げられる。今回作成した教材では，学習指導要領〔共通事項〕に示された「ア 音楽を形づくっている要素」の「旋律」「音色」「テクスチュア」「リズム」と，「イ 用語や記号など」の「和音」を扱う。表１は，これらの関係を示したものである。練習３のＭ・Ｒ練習では２つのパートを提示し，練習４の歌唱練習では，最も易しい a–1 の段階から全て合唱や重唱の形態で作成した。練習５においても２声の聴音書き取り課題を作成している。

表１ 学習指導要領〔共通事項〕と学習内容との関係

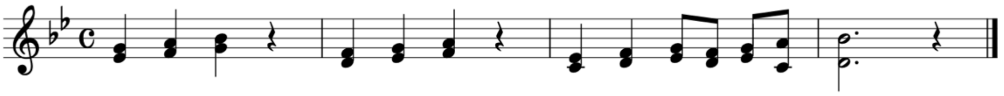
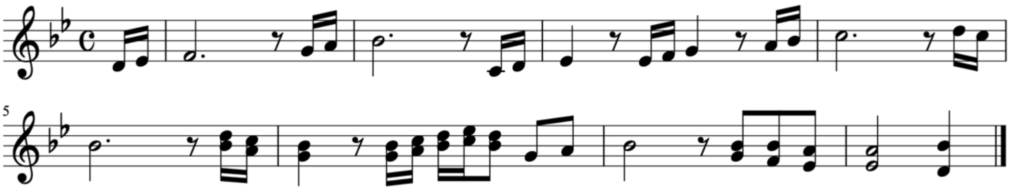
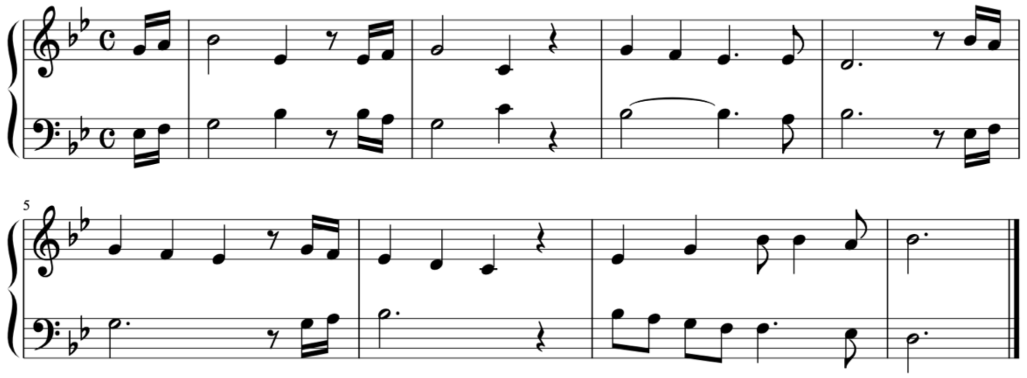
本教材の学習内容	ア 音楽を形づくっている要素								イ 用語や記号
	音色	リズム	速度	旋律	ﾃｸｽﾁｭｱ	強弱	形式	構成	―
順次進行				○					
ハーモニー（３度・６度）	○				○				和音
アウフタクト		○							

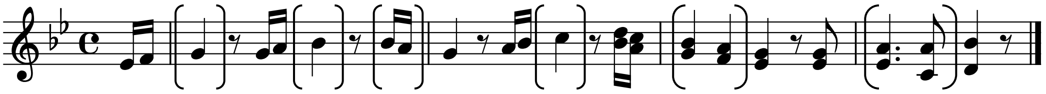
表２は作成した教材の学習展開を示したものである。本教材に設定したM･R部分は22―24 小節の「夢をたくして」の部分である。譜例７は練習４で扱う原曲に類似した音型による歌唱課題で，学習内容を取り入れた難易度の異なる３曲を作成した。a–1 は，順次進行と３度または６度のハーモニーの学習をねらいとしており，２声で歌う。音価の殆どが四分音符である。a–2 は，a–1 の学習内容にアウフタクトを加えたものである。a–1 と同様に２声で歌われるが，十六分音符を多く使用した曲になっている。b は，３つ全ての学習内容を含む２声の合唱で，フレーズの学習としても効果的である。a–1 や a–2 ではト音記号の２声であったが，b ではト音記号とヘ音記号に分かれた２声とし，原曲で扱われている反進行の要素も取り入れた。聴音書き取り課題においても原曲に類似した音型を用い，３つの学習内容を取り入れて作成した（譜例８）。ここでは特に順次進行の部分の書き取りを課題とした。

表２　作成した教材《旅立ちの日に》の学習展開

練習の段階	展開	指導内容／留意点
１　階名でリズム唱	○変ロ長調の音階を階名で確認 ○《旅立ちの日に》を階名でリズム唱	◇階名唱（移動ド唱）で歌うことで，各音の役割を考えて歌う力を身に付けさせる ◇この段階では，音程に完全さを求めず，多少違っても次に進む
２　階名唱	○《旅立ちの日に》の階名唱	
３　Ｍ・Ｒ練習	○音程を思い出すため，歌詞唱で歌う ①リズム通り　②同一音価 ○正確な音程を身に付けるため，移動ド唱で歌う　①同一音価　②リズム通り	◇最初にＭ・Ｒ部分を歌詞でリズム通りに歌うことで音程を思い出させる ◇音程を注意しながら正確に歌わせる ◇「上パート→下パート→２声」の順に練習
４　歌唱練習	○a-1，a-2，ｂの順に，移動ド唱で歌う	◇３つの学習内容を意識して歌わせる ◇３つの学習内容が習得できているか確認
５　聴音書き取り練習	○聴音を行う（穴埋め形式）	◇順次進行の音の繋がりの理解度を確認

譜例７　原曲に類似した音型による歌唱課題（練習４）

a−1

a−2

b

譜例８　原曲に類似した音型による聴音書き取り課題（練習５）



４．まとめ

今回，授業の一環として，M.R.S.理論の俯瞰的分析を行い，中学校音楽科での活用を想定したソルフェージュ教材の開発に取り組んだ。これらの教材が実際に学校現場で活用されることで，学習者に技能の伸長等の学習効果が見られるのか否かを検証することが次の課題である。なお，階名唱（移動ド唱法）に関しては，多くの音楽家や研究者による様々な議論がされてきた。その詳細にも触れたいところではあるが，紙面の都合上，次稿以降に行う。

付記：本稿は，１，２及び４は三沢，３．１は松浦，３．２．は八木，３．３．は高山が責任者として各章や節の執筆を担当し，全員による協議を経て発表するものである。

引用・参考文献

藤澤 孚（1985）．M.R.S.ソルフェージュ　教育芸術社

早川 倫子（2019）．夏の思い出　齊藤 忠彦・菅 裕（編）　新版中学校・高等学校教員養成課程音楽科教育法（pp.90–91）　教育芸術社

森 薫（2019）．早春賦　齊藤 忠彦・菅 裕（編）　新版中学校・高等学校教員養成課程音楽科教育法（pp.98–99）　教育芸術社

玉村 恭・長 環（2018）．《旅立ちの日に》は名曲か？　上越教育大学研究紀要，*38*，180–181.

2021年度　事業中間報告

【研究会および総会】

2021年度第3回研究会はコロナ感染症の影響により開催を見送りました。また，2021年度第4回総会は資料を郵送，葉書またはオンラインによる回答という形での実施となりました。

【第3回定例会】2022年2月12日（土）　《延期》

上記日程にて開催を予定しておりました第3回定例会は，新型コロナウィルス拡大により静岡県にまん延防止等重点措置が適用されたことを受け，延期することとしました。

【その他】

（1）「音楽教育実践報告誌」発行について

第3号を刊行しました。

（2）「卒業生による事業･演奏会補助」事業について

今年度は，申請者がありませんでした。

（文責：明和　史佳）

2021年度　卒業生　特別研究（卒業論文）題目

氏名	特別研究題目
太田　康葉	音楽と絵画の相互作用 ―印象派期における作品の分析及び考察―
緒方　航暉	augmented chord の用例の考察と実践
川上　美加	BGM の効果と影響について～睡眠用 BGM に注目して～
榊原　希	オペラ《ラ・ボエーム》「私の名はミミ」の演奏法について
佐野　慈姫	三大レクイエムの比較からみる、フォーレのレクイエムの魅力とは ―鑑賞教材の提案―
杉山　美紀	音楽が人間に与える影響について
髙山　理未	ペダルの効果を最大限に活かしたペダルの踏み方の提案
松浦　杏	レオンカヴァッロとヴェリズモ・オペラ～オペラ《道化師》を通して～
八木　瑞希	音楽科教育で移動ド唱法を使う意義と活用法

「音楽教育実践報告誌」投稿規約

2020 年 12 月 23 日

1　応募資格

会員登録されている学生から一般会員まで，どなたでも応募することができます。尚，未入会の方は本研究学会ホームページ（https://www.shizuoka-mes.com/）の入会申し込みフォームから会員申請ができます。（会員資格については本学会会則をご参照ください。）

2　応募内容

音楽･音楽教育に関わる未発表のものを条件に, 次の 6 つの領域での応募を行います。

⑴学術研究（論文）※教育研究，演奏解釈，楽曲分析，教育論等

⑵実践報告（教育現場での実践報告や実践的研究等）※学校教育現場とは限定しない。

⑶授業提案（実践的研究のうち，公開授業および提案授業報告，再考提案，教材研究結果等）

⑷演奏報告（演奏過程及び演奏実績の報告等）※演奏会活動等で本会の補助を受けたものは必ず報告すること。

⑸書評（音楽教育や演奏論，解説，学校教育等に関する印刷物についての検討，評価，意見等）

⑹批評（演奏作品や演奏についての検討，評価，意見等）

※尚，応募件数が 3 編以下の場合は次号による掲載といたします。

3　応募規定

⁑学術研究（論文）及び実践報告

⑴ファイルは A4 サイズ 40 字 40 行を規定値とし，上 35mm，下 30mm，左右 30mm の余白とします。

⑵フォントの大きさはタイトル及び章，項目のみ 12Point で表記し，内容は 10.5Point とします。

⑶フォントの種類は，日本字ではMS明朝体，英字ではCenturyを基本とします。

⑷図表及び楽譜の大きさ指定はありません。

⑸文の冒頭には「抄録（要旨）」を600字以内にまとめて表記することとします。その際，研究内容に関わるキーワードを５つ以内で表記することとします。

⑹応募原稿枚数は，4ページ以上，上限20ページ以内とします。

⁂授業提案・演奏報告・書評・批評

⑴書式の規定（ファイルサイズ，フォント指定，図表及び楽譜）は学術研究（論文）及び実践報告に準じますが，「抄録（要旨）」及びキーワードについては表記の義務はありません。

⑵応募原稿枚数は，授業提案・演奏報告4〜6ページ，書評・批評2〜6ページの範囲とします。※尚，「卒業生による事業・演奏会補助に関する内規」の第9条で示されている事業報告書（様式第2号）をこれに充てることはできません。

４　査読・審査及び選考

応募原稿は，報告誌の発行のために設置される査読委員会［学術研究（論文）］・審査委員会［実践報告・授業提案・演奏報告・書評・批評］によって選定され，掲載の可否が応募者に報告されます。掲載にあたって不適切な部分が生じた場合は，査読委員会・審査委員会より修正をお願いする場合があります。また，万一，著作権及び不適切な侵害行為があった場合は，掲載を取り下げることがあります。（尚，選定結果は発行日のおおよそ２ヶ月前に通知する予定ですが，若干の変動があることをご承知ください。）

５　報告誌の公開

この「音楽教育実践報告誌」は査読委員会・審査委員会を経て静岡音楽教育研究学会のホームページ上にて一般公開されます。また，掲載された論文については，以下のように取り扱うこととします。

⑴掲載された論文及び実践報告の著作権は，すべて本研究学会に所属します。

⑵掲載された論文等は，著者自身が学術，教育などの目的で使用することを承認します。

編集後記

昨年度，記念すべき「音楽教育実践報告誌」創刊号・第 2 号合併号を刊行した際には，次号刊行時には新型コロナウィルス感染状況は収束に向かっているものと思っていました。しかし人類を脅かす未曽有のウイルスを前に，未だに感染対策を強化せざるを得ない日々が続き，蔓延防止等重点措置が繰り返されております。本学会においても，今年度の定例会や研究会の開催を見送りました。会員の皆様におかれましては，制約を強いられる現状下で様々な対応に迫られながらも，創意工夫を凝らして教育実践や音楽活動に奮闘されていることと存じます。

このような中，無事に「音楽教育実践報告誌」第 3 号を刊行することができました。まずは原稿を投稿して下さった皆様にお礼申し上げます。本号では，投稿された原稿に対し，審査委員会による厳正かつ慎重なる審査のもと，本学教員による実践報告 1 編，本学非常勤講師による授業提案 1 編，本学教員と音楽専攻 4 年生 3 名による授業提案 1 編の計 3 編を掲載する運びとなりました。授業提案のうちの 1 編は，開催を見送った研究会で，研究発表を予定していた学生 3 名と授業担当教員による授業提案となっております。また，審査委員長による投稿 1 編の審査には，田代会長にも加わって頂き，審査委員と共に実施しました。本号に掲載となった 3 編のいずれにおいても，音楽教育実践のこれからを考える手掛かりとなりうるものであり，本号が会員の皆様のお役に立つことになれば幸いです。

次号においても，会員の皆様からの多くのご投稿を心よりお待ちしております。

（文責 : 望月たけ美）

音楽教育実践報告誌　編集委員

田代　和久【編集委員長】

三沢　大樹【兼，審査委員長】

明和　史佳

望月たけ美

音楽教育実践報告誌　第 3 号

発行日　2022 年 3 月 31 日
編集・発行者　静岡音楽教育研究学会
静岡県静岡市駿河区弥生町 6 番 1 号
常葉大学静岡草薙キャンパス 明和史佳 研究室内
054-297-6100(代)